

磐園陵墓参考地樋管改修その他工事に伴う立会調査

はじめに

磐園陵墓参考地の現住所は、奈良県大和高田市大字築山である。遺跡名は築山古墳であり、馬見古墳群南端に位置する。主軸を東西に向けた前方後円墳である。当参考地は顕宗天皇の陵墓参考地として管理されてきた。「陪塚編入 御陵墓伝説地地域ヲ定ム」『諸陵寮誌2 明治16～30年』〔宮内公文書館所蔵、識別番号56002〕には、「明治二十年五月廿四日・葛下郡築山村字城山官有古墳ヲ傍丘磐杯丘南陵ノ見込御陵墓伝説地トシ地域五千二百九十三坪ヲ以テ兆域ニ定ム 廿三年地録」とあり、明治20年5月24日に治定されたことがわかる。

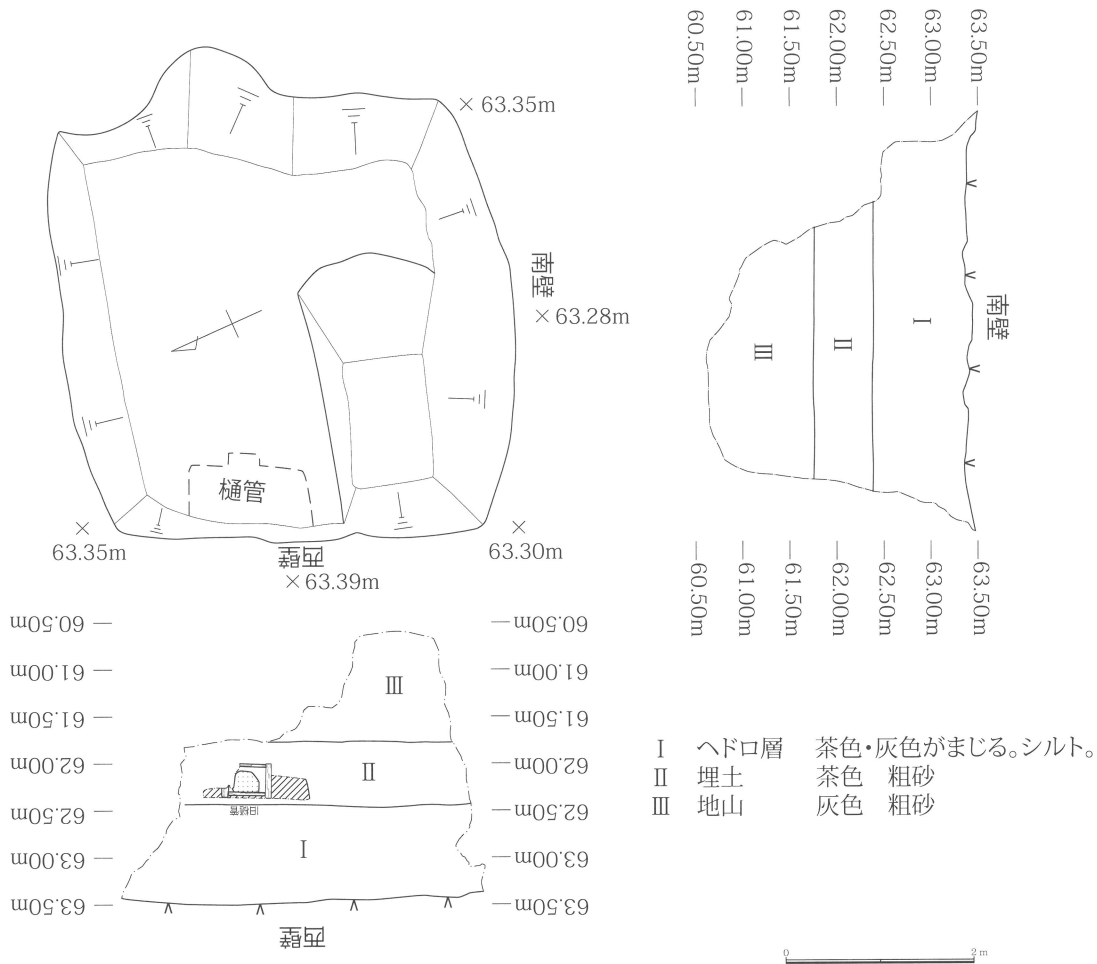
この度、当参考地後円部西側の外堤に位置する鋼製斜樋の樋管が詰まり、水が流れなくなったため、新たな箇所へ樋管を設置するための樋管改修その他工事が実施されることになった（第31図、図版29-1、2）。当参考地は周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれているため、立会調査をおこなった。なお、宮内庁京都事務所の工務課主導のもと工事準備が進められる中で、樋管設置箇所前の周濠内において想定以上にヘドロが堆積していることが確認され、周濠内への工事車両の搬入が困難であることが発覚した。そのため、急遽、仮設道路設置のための地盤改良が実施されることになり、その際にも立会調査をおこなった。調査は土屋隆史が担当し、畝傍陵墓監区事務所の松岡隆行、角野陽香、堤聖貴が補助した。調査期間は、仮設道路設置のための地盤改良に伴う立会調査が令和6年3月11日～15日、樋管改修その他工事に伴う立会調査が令和6年4月15～4月17日であり、これら以外の日には松岡、角野、堤が担当した。ここでは、掘削箇所の報告をおこなう。なお、調査に際しては大和高田市教育委員会の上西恭平氏にご指導をいただいた。

1. 既往の調査

昭和53年（1978）には前方部正面の外堤内法面の3箇所においてトレンチが設けられ、立会調査が実施された⁽¹⁾。地山削り出しによる斜面と葺石が検出され、原初の遺構と判断された。前方部正面の周濠と外堤



第31図 磐園陵墓参考地 調査箇所位置図 (1/2,500)



第33図 磐園陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図 (1/80)

周濠底の標高 第32図では、既往の調査で検出された各箇所における地山標高を示している。北側の地山が後世に改変された可能性をふまえると、地形に顕著な傾きはみられず、墳塋近くにおいてはほぼ水平な地形に造られたと推定される。今回の調査からは、標高61.9mより下に周濠底の地山があると考えられ、墳塋西側の地山高と比較すると、周濠の深さは少なくとも約1.3mはあったと推定される。

(2) 樋管改修その他工事に伴う立会調査

① 型枠設置に伴う工事

樋管改修（既存樋管の撤去、矢板設置、推進機設置にともなう基礎コンクリート打設のための型枠設置、推進機による掘削、ふとんかご設置）にあたり、長さ約4.0m、幅約3.5m、深さ約3.0mの範囲で周濠底を掘削した。掘削部分の形は維持することができたが、壁面が不安定であったため、掘削部分内には入らずに調査を実施した。平面図は、掘削部分外において平板測量によって作成した（第33図）。また断面図は、掘削箇所外からの計測と Agisoft Metashape Standard を用いたフォトグラメトリによる下図（図版29-4、6、8）をもとに作成した。周濠内表土の標高は約63.5mである。

比較的壁面が安定していた西壁と南壁をみると、表土から深さ約1.1mの範囲（標高62.4～63.5m）で黒色ヘドロ層、表土から深さ約1.1～1.7m（標高61.8～62.4m）の範囲で茶色の埋土、表土から深さ約1.7m付近（標高61.76mより下）から地山と考えられる灰色層が検出された（図版29-5～8、図版30-1）。埋土は既存の樋門設置箇所に近いところから検出される土層であり、昭和41年の木製樋の設置時と平成4年の鋼製斜樋への改修時に掘削された土に由来するものと考えられる。また地山は、外堤斜面を形成するような傾斜は確認できず、(1)の調査（周濠中央付近）で推定した標高とほぼ同じ標高で外堤下に続

くようである。黒色ヘドロ層からは、既存樋管の破片、コンクリート片等が出土した。その他、近世以前の遺物は出土しなかった。

外堤の構造 既往の調査から、前方部東側の外堤では本来の外堤が残存することが判明している。前方部側の周濠幅（前方部裾から外堤までの長さ）は約26.9mであり、後円部西側の周濠幅も同様であるとすれば、現状の外堤の下側には本来の外堤が残存している可能性が想定されたが、今回の調査では外堤内側斜面の遺構を検出することはできなかった。

②推進工事

周濠底の掘削後、西側に向けて樋管を通す推進工事が実施され、当庁管理地外の側溝と接続された。推進機には直径50cmの鋼管が使用され、鋼管内に残っている掘削土は高圧洗浄機を用いて洗い流し、バキューム機で吸引された。推進工事に際し、樋門から西に6.65～9.5m付近の箇所、標高62.100m付近において約30cmの石が20点、約20cmの石が13点出土した（第31、32図、図版30-6、7）。これは出土箇所からみて、外堤外側斜面の葺石である可能性がある。推進工事であるため調査は実施できなかったが、今後周辺で工事が実施される場合は注意が必要となる。

③開削工事

立会調査箇所西側の外堤上面と西側斜面下において、ガス管、水道管、電話回線の位置を確認するために、大和高田市教育委員会による立ち会いのもと掘削がおこなわれた。外堤上面（長さ約1.6m×約1.6m）では表土下約2.0mの深さ（標高63.18m）まで後世の造成土が確認された（図版30-2）。本来の外堤上面は既に削平されている可能性もあるが、上記のとおり葺石らしきものが検出された外堤外側斜面の一部が標高62.10mである可能性をふまえると、外堤上面はさらに下側にある可能性が考えられる。

また、外堤外側斜面下（長さ約1.8m×約1.0m）では、表土から約1.0mの深さ（標高62.24～63.24m）まで造成土が確認された（図版30-4）。その後、新規に設置された樋管を外堤外側斜面下の側溝と接続するにあたり、樋管出口箇所が表土から約2.0m下まで（標高61.24～63.24m）掘削されたが、そこでも造成土が確認された（図版30-5）。地山は既に削平されたと推定されるが現状よりも下にあると推定される。このように、開削工事箇所では地山は確認されなかった。立会調査箇所西側の外堤上面の標高と、西側斜面下面との標高差は約2.5mであり、顕著な高低差がみられることから（図版30-3）、西側外堤は後世に造成土が盛られ嵩上げされていると推定される。

まとめ

当参考地とかかわる遺構の情報を精査し、図面作成と写真撮影におこなった後に、樋門その他改修工事は進められた。新しい樋門が設置され、掘削箇所を埋め戻して改修工事は完了した。（土屋隆史）

註

- (1) 笠野 毅・井上喜久男「磐園陵墓参考地外堤隣接市道の護岸設置区域の調査」『書陵部紀要』第30号、宮内庁書陵部、1979年。
- (2) 川田貞夫「平成四年度 陵墓関係調査概要」『書陵部紀要』第45号、宮内庁書陵部、1994年。
- (3) 徳田 誠志「磐園陵墓参考地堆積土除去区域の事前調査」『書陵部紀要』第49号、宮内庁書陵部、1998年。
- (4) 徳田 誠志・清喜裕二「磐園陵墓参考地墳塋裾護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。
- (5) 清喜裕二「磐園陵墓参考地整備工事区域の立会調査」『書陵部紀要』第53号、宮内庁書陵部、2002年。



1 調査箇所 工事前 (南から)



2 調査箇所 地盤改良前 (東から)



3 調査箇所 地盤改良後 掘削前 (東から)



4 掘削部分 (上から)



5 掘削部分 西壁 (東から)



6 掘削部分 西壁 (東から)



7 掘削部分 南壁 (北から)



8 掘削部分 南壁 (北から)



1 掘削部分 北壁（南から）



3 外堤外側斜面（西から）



2 ガス管等確認工事 外堤上面の掘削状況（西から）



4 ガス管等確認工事外堤外側斜面下掘削状況（北から）



5 樋管貫通箇所 外堤下側掘削状況（西から）



6 推進工事中出土 外堤西側斜面葺石か



7 推進工事中出土 外堤西側斜面葺石か